



出典：「防災調整池等技術基準（案）」（平成4年、（社）日本河川協会）

図-6.1.1(9) 降雨強度式による降雨波形の作成

また、浸透量 Q_2 (m^3/s) を下記式により算定する。

$$Q_2 = I \times a \times (1/100)$$

ここに、 I ：透水係数 (cm/s)

a ：浸透面積 (m^2)

時間 ΔT (分)間の浸透池貯留量 ΔV (m^3)

$$\Delta V = (Q_1 - Q_2) \times \Delta T \times 60$$

※ ($Q_1 - Q_2$) < 0 の時は $\Delta V = 0$ とする

浸透池の必要容量 V (m^3) は、 ΔT 毎の ΔV を降雨終了時間まで累計し、

$$V = \sum (\Delta V_n) \times \alpha$$

ここに、 n ：当該時間

α ：安全率（工事中は「赤土等流出防止対策技術指針(案)」（平成7年、沖縄県土木建築部）を参考に1.1とした。）

(イ) 浸透ゾーン（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）の必要容量（工事中：1/10確率規模）

施工段階毎に浸透ゾーンⅠ～Ⅲに流入する雨水排水の必要容量算定結果を表-6.1.1(12)に示す。なお、浸透ゾーンの位置は供用時において示す（p6-1-30参照）。

■各浸透ゾーンの工事中必要容量は、①短期降雨強度、②長期降雨強度、による検討を行った結果、①短期降雨強度、による必要容量が大きくなることから、これを採用する。

以上の結果を踏まえて、工事中の雨水処理方法を以下の方針とする。

・工事中(1/10)の必要容量は、有効容量を確保した上で、不足する分については空港建設地内に確保するものとする。